

フロベールと子供のイメージ

平山規義

フロベールがいかなる意味においても、いわゆる「児童作家」でなかったことは、言うまでもない。「ボヴァリー夫人」(1857)から『三つの物語』(1877)まで、フロベール自身によって公にされた作品のなかで、「子供」が中心的な主題として扱われている作品はない。しかし、19世紀という時代においては、フィリップ・アリエスが指摘したように、「家族」と「子供」に結びつくものごとはずべて重要な社会的関心事であった¹⁾。19世紀を舞台にしたフロベールの小説『ボヴァリー夫人』、『感情教育』、『三つの物語』のなかの『純な心』²⁾、これらの作品のなかにも多くの子供たちが脇役として登場し、主人公たちの人生にさまざまに関わってくる。本小論ではこの三つの作品を中心に、それぞれの物語において子供たちに与えられた役割を検討し、フロベールにとって子供とはどういう意味をもっているのかを考察してみたい。

1. 未来を託された子供

アリエスの記述によれば、18世紀の家庭の内部では二つの子供観が見られるようになったという。つまり純真無垢な神の被造物としての子供、および、徳育と再形成を必要とする存在としての子供という観念である。そしてさらに、子供の衛生や身体の健康に対する配慮という新しい関心がこの時代の書物のなかに現れてくる。子供はその未来だけでなく、現在の姿および子供という存在それ自体に関心が寄せられるようになり、家族のなかで中心的な場を占めるようになったのである。アリエスは分析を18世紀までで終えているが、このような家族と子供の関係は、別のかたちで現れるにせよ、19世紀・20世紀へと引き継がれてゆくであろう。

『ボヴァリー夫人』の第一部の冒頭で描かれたシャルルの少年時代は、まさにこの時期における中産階級の家庭の子供たちの典型的な姿であろう。王制復古期の退役軍人であるシャルルの父親は「少年期に対する一種の男性的理想像」を抱いており、息子シャルルの体格をよくするためにスパルタ式に厳しく育てようとするが、生来おとなしい息子はこれについてこれず、母親はこの子を溺愛する。

母親はいつもこの子をそばに連れていた。厚紙を切ってやったり、お話をしてや

ったり、彼を相手に、寂しいふざげや、くどい甘やかしにみちみちた果てしないひとりぜりふを聞かせるのであった。捨子舟のように寂しい彼女は、さんざんに打ちこわされた自分の虚栄をすべてこの少年の上に託した。彼女は立身出世を夢み、この子が早や大きく美しくひとかどの才子になって、土木局か法曹界におさまっている姿を想像した。子供に読み方を教え、手持ちの古ピアノで唄の二つ三つも歌うことを教えた³⁾。

その後、父親の反対にあってシャルルの勉強は一時中断されるが、母親のたつての望みによって、司祭一任のもとでの学習を経てルーアンの学校へとやられることになる。男の子と女の子の違いはあるにせよ、母親がシャルルに対して抱いたのと同様な願望や夢を、今度はシャルルが自分の娘ベルトに対して再現することになるだろう。

子供(=ベルト)も近頃はすくすく大きくなってゆく。季節ごとにめきめきと成長するだろう。シャルルはこの子が服にインキをつけ、バスケットを腕にぶらさげて、日暮れごろ、ニコニコ学校から帰ってくるさまを想像した。小学校を出たら塾へ入れねばならぬ。ずいぶん費用がかかるがどうしたらよかろう。彼は思案した。近所に小さな農園を借りて、毎朝往診の途中に自分で指図しようと考えた。農園の収入を節約して郵便貯金にしよう。それから、どれでもよい、株を買おう。それに患者もふえるだろう。シャルルはそれを当てにしていた。というのも、ベルトを立派に育て、女のわざを仕込み、ピアノも習わせたいからのことであった。(…)あの子は家事を切りもりするだろう。あの子はやさしさとほがらかさで家じゅうをいっぱいしてくれるだろう。それからいよいよ嫁入りのことを考えてやらねばならぬ。地位の安定した実直な男を見つけてやろう。その男は娘を幸福にしてくれるだろう。そしてそれがいつまでも続くだろう⁴⁾。

しかし、ここで問題なのは、このような子供たちに対する親の配慮とは、国や時代をこえた普遍的なものなのだというような教訓を導きだすことなどではない。親が子供の将来の幸福を祈り、彼らの健康や教育、就職や結婚に気を配るのは当然のことであり何の不思議もないことなのである。が、そこにこそ問題があるとフロベールは考えるのである。シャルルや彼の母親に代表されるような親の態度とは実は非常に慣習化され制度化されたものなのだ。ウラジミール・ナボコフが「ヨーロッパ文学講義」のなかで指摘しているように、このような「もっぱら人生の物質的な面に心を奪われ、ただひたすら習慣的な価値のみを信じて疑わない」ようなある心の状態をフロベールは「ブルジョワ」と呼んだのである⁵⁾。従って、フロベールが「ブルジョワ」という言葉に与えた意味とは、マルクス主義的な特定の社会階層を指すような、政治的経済的な意味合いではない。既成の制度や習慣に安住し、自分たちの生活を社会の流れに

合わせて過ごし、そういった制度のなかでのみ幸福を追い求める、近代の人間はおそらくその制度の網の目から逃れることは不可能なのではあろうか。こうしたブルジョワ社会における子供とはいったいどのような存在なのであろうか。

先の引用からも明らかなように、親が子供たちに向ける視線は、今現在、目の前にいる子供を通り抜け、未来へ未来へと伸びてゆく。現在の子供の姿とは、親の夢を写しだすスクリーンにすぎない。「進歩」を旗頭に掲げるブルジョワにとって、子供の成長こそが、もっとも身近に具現化された「進歩」の姿であろう。子供には過去という時間は存在せず、彼らに認められるのは現在と未来の時間なのである。また、そこに投影された親の夢のテーマは、「我が子の幸せ」を装った、実は「親自身の幸せ」にはかならない。エンマが妊娠中に子供について考える場面を見てみよう。

男の子が欲しかった。さだめし丈夫な、髪の毛の黒い子供ができるだろう。その子にはジョルジュという名をつけてやろう。男の子が欲しいという考えは、過去いっさいの自分の臍甲斐なきにたいして、いわばうめ合せの希望を持つことであった。男は少くも自由ができる。いろいろの欲望や国々を駆けめぐり、じゃまものを乗り切ってどんなに遠い幸福でもつかむことができる。しかし女というものは自由をさまたげられてばかりいる。女は無気力で同時に御しやすい。だから肉体の弱さと法律の束縛が女の敵となる。女の意志はちょうどそのかむっている帽子のヴェールのように、紐でとめられたまま風のまにまにひるがえる。そこには誘ってやまぬ欲望があり、じっと引きとめる世間体がある⁶⁾。

また、フロベールがつくり出したブルジョワの典型、薬剤師オマーが自分の子供たちに行った命名のエピソードは、このようなブルジョワの夢を象徴している。

オマー氏はどうかというに、彼はすべて偉大な人物、かくかくたる事績、高邁な思想を思わせる名が好みであった。四人の子供にもその方針で名をつけた。すなわちナポレオンは光栄を表象しフランクリンは自由を表象する。イルマはおそらくローマン主義に一步をゆずったものであろうが、アタリーこそは、フランス演劇界最大不朽の傑作にたいする讃美のしるしであった⁷⁾。

このように、フロベールの小説において、子供とは、なによりもまず、シャルルの少年時代に代表されるように、まったく受け身で無力な存在であり、それゆえに親たちのブルジョワ的な未来の夢を一身に託される存在として提示されている。

II. 主人公たちの挫折と子供

さて、以上では、フロベールがブルジョワの時代精神を色濃く映しだした『ボヴァ

リー夫人』を通して、フロベールの目から見たこの時代の子供たちの位置づけを行ったが、次に、そのような子供たちがそれぞれの小説の物語の展開のなかで、主人公たちとどのような関わりかたをしているのかを、『ボヴァリー夫人』『感情教育』そして『純な心』のなかに見てみよう。

『ボヴァリー夫人』のなかでは、まずオメー一家の四人の子供たちがあげられるが、彼らは前章でもふれたように、オメーの俗物ぶりを表す小道具として扱われているだけであり、つねに物語の背景に埋没した存在である。この小説のなかで、主人公のエンマそしてシャルルの人生との関係において、とくに注目しなければならないのは、彼らの娘ベルト、そしてオメーの薬局で見習いとして奉公しているジュスタンという少年であろう。『ボヴァリー夫人』の第一部第九（最終）章、エンマの情緒不安定な神経症の回復を願い、四年間も居を構えて「やっと根を下ろしかかった」トストの町を引き払い、ヨンヴィルへの転地を兼ねた引っ越しを決意する場面である。ここには、次のような有名なエピソードがある。

ある日、出立を見越してひきだしのなかを整理していると、彼女は何かで指を突いた。結婚の花束についている針金であった。オレンジのつぼみはほこりに黄ばんでいた。銀の縁を取った縞子のリボンも、ふちの方からほぐれていた。エンマは花束を火に投じた。それは乾いた藁よりもはやく燃えあがり、やがて灰の上に真紅の草むらとなつてじりじりとむしばまれた。エンマはその燃えるのを見つめていた。ボール箱の小さい果ははぜ、真鍮の針金はくねり、打紐は溶けた。紙の花はちぢみあがつて、暖炉の奥の鉄板をつたって黒い蝶のようにゆらいでいたが、とうとう煙突から飛び去って行った⁹⁾。

これは実質的には、明らかにエンマにとっては、結婚状態との訣別の儀式にほかならない。これ以降エンマは、レオンやロドルフとの恋愛沙汰をかさね、形骸化した夫婦生活を送ることになるだろう。そして、このエピソードの直後、第一部は次の一行によってしめくられる。

三月、トストをたったときボヴァリー夫人は妊娠していた⁹⁾。

このように、エンマの妊娠が彼女にとって、いかに不毛なものとなるかが暗示されている。前章で見たように、彼女はシャルルとの結婚によって挫折した夢を、生まれてくる子供に託そうとする。しかし、男の子を望んだエンマの夢はここでもまた挫折してしまう。彼女はこの娘に時として憎しみさえ覚えるのであるが、人前では、虚栄心から、溺愛しているふりを装うのである。エンマの子供に対する可愛がりかたは、ブルジョワの習慣や制度をなぞっているだけであり、シャルルやオメーの態度と決定的

に違うのは、彼女がもはや子供のなかに未来という時間を見出すことがなくなってしまったということである（これは、後に述べるフロベールの子供に対する意識との関連において、注意しなければならない問題である）。こういった事情を象徴するかのようこの哀れな娘は、小説の結末では母親を失い、また、父親の死に立ち会うことになる。

七時になると、屋じゅう父親の顔を見なかったベルトが夕飯に呼びにきた。

父親は仰向けに頭を壁にもたせ、眼をつむり、口をあけて、重いひとふさの黒髪を両手に持っていた。

「父ちゃん、いらっしゃいってば！」

父親がふざけるつもりなのだと思って、ベルトはそっと突いた。彼は地べたに倒れた。死んでいた¹⁰⁾。

オメーのもとで働いているジュスタンという少年は、たいへん気の弱い少年で、シャルルがロドルフの使用人に瀉血治療を施している時、その手伝いをしていた彼は、多量の血を見て真っ青になり気絶してしまう。彼はエンマに対して、密かなあこがれを抱いている。また彼はある日、オメーがジャムを作るための鍋をとりに行かせると、危険な薬品でいっぱいのおメーの仕事部屋から、砒素が入った瓶のそばの特製の鍋を誤って持って来てしまって、オメーにこっぴどく叱られるというエピソードがある。エンマは偶然その場面にいあわせており、砒素の置いてある場所を知ることになる。そして、借金の返済のための金策にかけずりまわったが、徒労に終わってしまい、全てに絶望したエンマは思いあまって自殺を決意し、オメーの仕事部屋の砒素のことを思い出す。彼女はジュスタンから部屋の鍵を借りようとするが、何か恐ろしい予感があった彼はそれを断ろうとする。しかしエンマは鍵を奪って部屋のなかに入り、止めようとしたジュスタンの目の前で砒素の粉を貪り食うのである。エンマが死に、その埋葬が行われた晩に、ジュスタンは墓の前で一人涙を流すのである。

縦林のなかの墓穴のほとりに、一人の少年（＝ジュスタン）がひざまずいて泣いていた。すすり泣きに痛むその胸は、月光よりもしめやかに夜よりも測りがたい無量の愛惜にひしがれて、闇のなかにあえいでいた¹¹⁾。

次に「感情教育」を見てみよう。主人公のフレデリックとアルヌー夫人との関係においては、アルヌー一家の二人の子供、娘のマルトとその弟ウジェーヌの存在は欠かせないものとなっている。フレデリックとアルヌー夫人との船の上での劇的な出合いを導いたのは、娘のマルトだと言ってもいいだろう。娘が泣いているという従僕の知ら

せて、フレデリックと話をしていた父親のジャック・アルヌーは姿を消す。そして、自分の席に戻ろうと客室に入り、そこに一人で座っていたアルヌー夫人を目にしたとたん一目惚れしてしまう。

なんというひとだろう？ 住所は、身の上は、その過去は？ 彼はこの女のいる部屋の家具、今まで身につけた衣裳、つきあった人、みんなを知りたい心地がした。そして、肉体的にわがものとしたい欲望さえ、それよりもっと深い望み、果しない、苦しいほどの好奇心のなかに消えてしまっていた¹²⁾。

そこへ目を泣きはらした女の子を、黒人の女中が連れてくる。

女（アルヌー夫人）は子供を膝に抱き上げた。《嬢ちゃん、お利口じゃありませんでした。もうすぐ七つだのに —— 母さんはもうそんなひと可愛がってあげませんよ —— あまり甘やかしてばかりいるんだもの》フレデリックはこういうことが聞けてうれしかった。何か一つの発見、獲物でもしたようだった¹³⁾。

フレデリックにとっては、その女性が既婚でしかも大きな子供までいるということは、問題ではなかった。そして、夫人の子供に対する態度で、彼は自分が夫人に抱いた直観が誤りでなかったことを確認する。パリに着くと、フレデリックは足しげくアルヌー一家に出入りするようになる。彼は子供たちをたいへん可愛がって愛想をふりまくのだが、それも夫人の歡心を買うためである。ある日、サンクルーの別荘で夫人の誕生日の祝賀会が行われる。夫のアルヌーは愛人のもとへとひとあし先に帰ってしまう。婦りの馬車のなかで、マルトを間にはさんで、彼は傷心の夫人と二人きりになる場面がある。夫人が自分に気があると勘違いして、フレデリックは暗に自分の気持ちをほのめかす。

二人の間に横に寝ている子供のからだをとおして、彼女のからだに触れ合っているような気がした。彼は女の子の上に身をかがめて、美しい栗色の髪を分けながら、そっと額に接吻した。

「あなたは優しい方ね」アルヌー夫人はいった。

「なぜですか？」

「だって子供がお好きのようだから」

「どの子供でも、じゃありません」¹⁴⁾

また、フレデリックは故郷のノジャンに一時帰省した折りに、その町の名士ロック老人の家の十歳ぐらいになる娘ルイズをおおいに可愛がるようになる。

ちょうどマルトくらいの背の高さだったので、フレデリックは二度目に会った時にこういった。

「キスさせてくださいな、お嬢ちゃん」

女の子は顔を上げてこたえた。

「ええ、いいわ」

(...) 彼は垣の上からのり出して、女の子の腕をつかんで抱き、両頬に接吻した。それから、また娘を同じようにしてもとに下ろした。それからはいつもそれをくり返した¹⁵⁾。

フレデリックが、ルイズを通してマルトを、そしてマルト通してパリにいるアルヌー夫人を求めているのは明らかである。彼はやがて、いいかげんな夫に愛想をつかしたアルヌー夫人を懐柔し、二人は親密な関係になってゆく。こうなると、フレデリックは夫人の愛情を獲得するのに、もはや子供たちの存在を必要としなくなり、息子のウジェーヌが風邪をひいているのにもあまり関心を示さない。しかし、二人がトロンシェ通りでの逢引を約束した日（二月革命勃発の日）に、このウジェーヌの病気が急に悪化し、アルヌー夫人は持ち合わせの場所に行くことができなかった。咳に苦しむウジェーヌの描写の場面はすさまじく、革命の動乱に揺れる社会状況と、良心の呵責に大きく揺れ動いているアルヌー夫人の心情を象徴的に表している。

その前夜、アルヌー夫人はこんな夢を見た —— 自分は長い間トロンシェ通りの歩道に立っている。彼女はそこで、何かはっきり定まらないもの、だが何か大切なものを持っているの、しかもなぜかわからないが人に見られては困るのだった。一匹のうるさい子犬が飛びついて着物の裾をしきりと噛んだ。犬はいくらでもしつこくすがってきて、だんだんつよく吠えてた。アルヌー夫人は眼をさました。犬の鳴き声はつづいている。耳をそばだてると、子供の部屋から聞こえてくる。すぐ、素足のままかけつけた。子供が咳をしているのだった。手はやけるように熱く、顔はまっ赤で、声はへんにしゃがれてしまっていた。呼吸の苦しもうなのが刻々にひどくなる¹⁶⁾。

やがて、おそろしい咳がまたはじまった。ときどき、子供ははね起きようとしたりする。痙攣で胸の筋肉がふるえ、いきをすると走った後であえぐように、腹がくぼんだ。そして、口をあんぐりあけたまま、頭をそらして倒れてしまう。アルヌー夫人が薬壺の中のイベカ吐剤やケルメス水を飲ませようとすると、子供は弱った声でうめいて、匙をおしのけた¹⁷⁾

子供は息を苦しくするものをとりたがるのか、首に巻いた布を引きむしりだした。そして、呼吸する力のすがりどころを求めて壁を引っかいたり、寝台のカーテンをつかむ。顔が青味を帯び、からだじゅうは冷汗でぐっしょり濡れ、瘦せたように見えた。けわしい眼が、恐怖にみちて、じっと母のほうにすえつけられている。そして、両腕を母の頸にかけて、やたら無性に、しがみついてきた¹⁹⁾。

子供はぐったり伸ばしたからだを風に吹かれる波のようにぞくっとふるわせる。眼の玉がぐっと飛び出していた。彼女はもう、今にも死んでゆくような気がし、眼をそむけた。

ちょっとして、また思いきって、見てみる。子供はまだ生きていた。時間は、重くなるしく、陰気に、果しなく、絶望的につついていった。(…)咳で胸が動くことからだを打ちつけるように乗り出し、とうとう、何か羊皮紙の管のようなへんなものを吐いた¹⁹⁾。

ウジェーヌはその後快復へと向かうのだが、病気に苦しむわが子のなかに死の影を見てしまったアルヌー夫人は、フレデリックとの恋愛にうつつをぬかしていた自分自身を激しくせめる。

突然、フレデリックのことが、はっきり、厳正な気持ちで、心にうかんだ。これは神のおさとしてあったのだ。主は憐憫の心から、彼女を打ちのめすまでお罰しにはならなかった。もしこの恋にいつまでも執着したら、この先どんな償いをしなければならぬだろうか？ きっと、子供は母の罪のために世間からあなどられるだろう。アルヌー夫人は青年となった子供が人との争いで傷つけられ、瀕死の姿で担架に運ばれてくるようすを心に描いた。と、一飛びに小さな椅子の上に身を投げかけて、力のありたけをこめて、魂を高く天にかけらせ、このただ一度の心のゆるみ、生まれて初めての恋を、燔祭の犠牲をささげるように、神にささげた²⁰⁾。

アルヌー夫人は「子供の将来のため」に、フレデリックとの恋に終止符を打つのである。そして彼は、そんな夫人に激しい怒りを覚え、革命の騒ぎのなかに死んでいったブルジョワたちに冷酷な一瞥を投げかけ、ロザネットを新たな愛人として過ごすことになる。このロザネットは、やがてフレデリックの子供をみごもることになる。

「感情教育」のなかで、このロザネットの妊娠、出産のエピソードは重要である。フレデリックはアルヌー夫人と再会し、お互いの気持ちに変わりがないことを確認するが、ロザネットに邪魔をされる。そして彼女は男に妊娠のことを告げる。

彼はこぶしを振り上げた。

「あたしを殺すのはよして！ あたし妊娠してるのよ」

フレデリックはたじたとさがあった。(…)

この出来事は思いもかけぬ災厄だった。だいいち、この女と急に別れられぬようになるし、しぜん彼の一切の計画をぶちこわしてしまうのだ。それに、父になるといった考えが滑稽だし、まったく考えられないことだ。が、なぜだろう？ もしこれがロザネットでなくて……？ 想像がひどくつって、さながら幻覚を見ているような心地になった。そこの絨毯の上に、暖炉の前に、可愛い女の子がいるような気がする。アルヌー夫人に似て、また自分にもちょっと似た娘だ。褐色髪で色白で、黒い眼、大きい眉、巻毛にばら色のリボンをつけて！ どんなに愛したことか、その女の子を！ 《パパ、パパ！》呼ぶ声がきこえる気がした。着物をぬいできたロザネットが近づいて、男のまぶたがちょっと涙に濡れたのを見て、額に真面目らしいようすで接吻した。彼は立ち上がった。こういって——

「なあに、その赤ん坊は死なしゃしないさ」

と、ロザネットは勢いづいてしゃべりだした。きつと男よ、という。名前はフレデリックにしよう、着物の準備もしくちゃ——²¹⁾

ロザネットは、生まれてくる子供に愛するフレデリックの分身を求め、フレデリックはアルヌー夫人の分身を求めようとしてる。父親になることに嫌悪を覚えているフレデリックも、このような欲望のために、ロザネットに「アルヌー夫人の娘」を産ませることを決意する。しかし、そうしている間にもフレデリックは、ダンブルーズ家に出入りして、ダンブルーズ夫人を愛人にし、ゆくゆくは結婚してその財産を手に入れようとしたり、県議員選挙に立候補を企てるなど野心を見せるのであるが、そのことごとくは失敗におわる。アルヌー夫人を思うよすがとなるべきわが子は、女の子ではなくて「骸だらけでいやなおいがする」男の子の赤ん坊であった。この父子の対面は「ボヴァリー夫人」のエンマの出産の場面を想起させる。エンマはわが子にブルジョワ的な夢を託して挫折し、フレデリックはアルヌー夫人への愛を託して挫折してしまう。そのうえ、彼は子供の将来を悲観し、次のように考える。

やがてまた彼の眼は自分の子供の上に落ちた。これがもう一人前の若者になった姿を眼に浮かべる。いい話相手になるだろう。いやしかし馬鹿な男になるかもしれん。きつと不幸な人間だろう。生まれがちゃんとしていないことにいつまでも苦しむにちがいない。生まれぬほうが仕合わせだった。《かわいそうに！》フレデリックはつぶやいた。わけのわからぬ悲しみで胸がしめつけられるのだ²²⁾。

そしてフレデリックのこのような心情を反映してか、その赤ん坊は鷺口瘡という口の

なかの発疹によって、じきに衰弱死してしまうのである。子供の死に半狂乱になったロザネットの姿を眺めていて、フレデリックは不安に震われる。

こういうようすをしじゅう見ていたフレデリックは夢を見ているような心地だった。胸は何か強い不安のようなものでしめつけられていた。いま目前に見たこの死は手はじめにすぎず、そのあとからもっと大きな不幸が今にも起ころうとしている、そんな感じがした²³⁾。

このようなフレデリックの不安が象徴するように、フロベールの小説において、エンマやフレデリックのようなフロベール的人物にとっては、子供には、その誕生からして、彼らを挫折へと導くような役割が運命づけられていると言えるのではないだろうか。そして、さらに残酷なことには、物語のなかで子供たちは、幼くして死を与えられる場合もある。前記の「感情教育」のなかの赤ん坊の死体の描写は、「ボヴァリー夫人」のエンマの死の姿のそれに匹敵するものだろう。死んだ赤ん坊をミイラにしてとっておきたいというロザネットを説き伏せて、フレデリックはベルランに頼んで赤ん坊の肖像画を描かせる。

死んだ子のほうも、もう今では見わけがつかなくなっている。唇の紫がかかった色が肌をいっそう白くしていた。鼻孔が小さくなり、眼がすっかりくぼんでしまった。頭は青い琥珀織の枕ののっけられて、その両側につばきと秋のばらの花卉とすみれの束がおかれていた。(…) 女たち二人でつましい気持ちでこういうふうに飾ったのだ。透しレースの覆いをかけた暖炉棚には銀燭台の間に聖黄楊の束が見える。隅には二つの香炉にトルコ香が焚かれていた。こうしたあたりのようすは揺籃と相まって、休憩祭壇のような形をつくっていた²⁴⁾。

このような子供の姿を見てもなお、ロザネットは「死んだ子の歳を数える」ような夢想にふける。

もう数カ月したら歩きだしたろう、それから学校の中庭で人取り遊びをしているところ、二十歳の青年の姿、一つ一つ眼にうかぶ。こうして自分でつくり出す数々の面影は、それだけの数の子供をなくしたような気にさせた。過度の悲しみは母心をこうして幾倍にもするかして —— ²⁵⁾

「三つの物語」のなかの「純な心」という短編小説は、子供の成長を縦軸に展開する物語であると同時に、子供の死を契機とした、主人公フェリシテの苦悩とその救済

の物語だと言ってもいいだろう。彼女には子供はいなかったが、奉公先の二人の子供ポールとヴィルジニーという兄妹——とりわけヴィルジニーを——と、甥のヴィクトールをわが子のように可愛がる。しかし、船乗りのヴィクトールが渡航先のアメリカの地で、黄熱病がもとであっけなく死んでしまったという知らせを受け取ったのもつかの間、今度はヴィルジニーが、あずけられていた修道院で、肺炎を患って死んでしまう。ここでもまた子供の死体の描写がある。

二晩のあいだ、フェリシテは遺骸のそばを離れなかった。同じ祈りの言葉を繰り返し、敷布の上に聖水をかけては、また席にもどって腰を下ろし、じっと遺骸を見つめていた。はじめの晩のお通夜の終わりには、顔の色もいつのまにか黄ばみ、唇は青ざめ、鼻は尖り、眼がくぼんできたのに気がついた。フェリシテはその眼に何度か接吻をした。そしてたとえヴィルジニーが再びその眼を開けたとしても、さして驚きはしなかったろう²⁶⁾。

フェリシテは形見として、ヴィルジニーの金髪をこっそりひと房切り取って持って帰る。オバン夫人からも形見を分けてもらって自分の部屋に持ち込んでゆく。

そこは、あたかも礼拝堂と鐘工場をいっしょに兼ねた趣で、いかにも神様を祭る品々がならんでいた²⁷⁾。

例の鸚鵡のルルの剥製もそこに加えられることになる。形見とは本来それを見ることによって、死んだり別れたりした人のことを思い出させる品物なのであるが、フェリシテはそれらの物を通して、ただ亡くなった子供たちだけではなく、宗教的な崇高なものの存在を見ているのである。物そのもののなかに神が宿っているかのような、汎神論的な幻想を抱いていると言ってもいいだろう。このように、フェリシテにとっては、子供とは、現世の物質的な幸福を追求しようとするブルジョワ的な欲望を向ける対象ではなく、神のような崇高な存在へと導く聖霊となるのである。

III. フロベールの子供観

これまで見てきたように、フロベールが作品のなかで子供たちに与えてきた役割は、きわめて意図的なものであることは疑いないだろうが、フロベールには、子供をこのような存在にしか描けないのではないか。彼のなかにあるそのようなコンプレックスを、彼の書簡のなかにも求めてみよう。

ルイズ・コレ宛〔ルーアン、1846年12月2日〕

(...) 子供をつくることに長いあいだ抵抗してきたのは、じつはそのためです。

ぼくが産ませる子なんて、どうしようもなくみじめな人間にちがいない！ きつとおしゃべりさえしてくれないでしょうよ、ろくに生きもしないうちに死にたいって言い出すでしょうよ。このぼくが、うんざりしきって生まれてきたんだ、こいつはぼくをむしばむ業病なんです。ぼくは人生にも、自分にも、他人にも、あらゆることに、うんざりしている。氣力をふりしぼって、ようやく仕事をする習慣を身につけました。でも仕事を中断すると、生きることのわずらわしさが水面に浮かびあがってくる、まるでふくれあがった獣の屍骸が、緑色の腹をひけらかし、人の吸いこむ空気に悪臭をはなつような具合にね²⁸⁾。

フロベールは現実の世界に、死ぬほどの倦怠を覚え、それを忘れるためにせせと仕事（文学）に励む。このうんざりするような世界に、自分とおなじような係累を新たに作り出すこと——それはブルジョワたちが日々繰り返していることだ——への嫌悪が読みとれる。次の書簡をみてみよう。

ルイズ・コレ宛（ルーアン、1847年1月21日）

(...) 誓ってもいいが、ぼくはもうへとへとです。それにぼくは、永遠に恨めしく思わずにはいられないんですよ、ぼくをこの世に送り出し、そうしてこいつはもっと迷惑な話だが、ぼくをこの世に引きとめているあの人たちを。いや、そうなんだ、それもまた愛のなせるわざっていうんでしょ、おそらくはね。御立派ですよ！ 彼らは愛し合っていた！ 彼らはおたがいにそう言い合っていた、そしてある夜、ぼくをこきえて大いに満足したわけだ。でもぼくが満足したかどうかは、まるで気かけちゃいない。子をつくる男よ、呪われてあれ、愛する男よ、のろわれてあれ。。——その男の息子の人生が、その男にとっての責め苦となりますように。とほうもない倦怠が、巨大な倦怠が、貪婪にががつと、子供を蝕むとき、それが父親にとって、彼自身生きてきたことを後悔するほどの呵責となりますように²⁹⁾。

ここには、愚劣なブルジョワの子として自分をこの世に送り出した両親にたいする呪咀がある。そしてそのような子の親に対する復讐が予言される。また、フロベールはルイズが自分の子供を妊娠したのではないかという不安に、激しい動揺の色をみせる。

(...) 何者かに生命を与えるという考えは、ぼくを慄然とさせます。父親になったりしたら、それこそ自分を呪うでしょう。——ぼくの子、それだけは、絶対に、絶対に、御免です！ ぼくの肉体はすっかり消え去って欲しいんだ、人生の倦怠と屈辱は、だれにも伝えたくない。——そんな可能性があるかと知っただ

けで、ぼくの魂の潔癖さがいっせいに反抗の声をあげた、(...) 明日、ぼくは三十一になる。つまり、男というものが器にはまる三十歳という宿命の歳を、通過したわけです。この年齢になると、だれでも自分の未来を想い描き、身を固める、結婚したり職に就いたりする。三十歳でブルジョワにならぬ人間は、ほとんどありません。ところで今回の父親になるかもしれないという話は、このぼくを、人生の通常の状態に引きもどしたのです。—— 世間に対してぼくが守ってきた純潔が、失われてしまった。おかげで、凡人の惨めったらしきの渦中に、ぼくは引きこまれてしまった。(...) ³⁰⁾

異性と交わっても、それが不毛であるならば、つまり子供をつくらなければ、純潔が守られるということに注意しよう。フロベールにとって子供を持つことは、とりも直さず、自分が忌み嫌っているブルジョワの生き方に加担することであり、どうあっても避けなければならないことである。彼は、自分自身もブルジョワを両親に持ってこの世に生まれ出てきたことさえ呪っている。彼は若い頃から、常人には理解できかねるほどの倦怠感に押し潰されそうになり、その重圧から逃れるために芸術の世界にのめりこんでゆく。彼にはこの倦怠が、未来に向かってつづいてゆくこと、自分から発生していく子々孫々へと受け継がれてゆくことなど、決して許されないことだったに違いない。ジョルジュ・ブーレは、「人間の時間の研究」のなかで、「フロベールの想像力は、回顧的なかたちでは生き生きとしているのに、前方には何もも見出さない」と指摘し、フロベール自身の言葉を引用し、次のように述べている。

「かくてぼくは夢みつつ過去から未来へとおもむくのだが、未来にはぼくはなにも見ない、何ひとつとして。(...)」

未来を持たず、過去に蝕まれ、現在の重みに打ちひしがれて、思惟はもはや持続というものを、いたずらに鈍い動き、緩慢化した時間としてしか捉えられない。「一年に相当する一分」をかくもしばしば生きたために、自分をすでに老いたと感じる。生きているという感じは、あのだらだらした持続に、絶えず同じものが付加累積されてゆく感じとなり、人生はもはや繰り返してしかなくなってしまふ。(...) 持続の流れは停止したにひとしい。それはもはや河ではなく、淀んだ水「眠った沼、静けさのあまり、ほんの小さな出来事が水面に落ちてさえ、無数の波紋の生じる沼」だ。表面だけの動揺、すべては夢で、空しく老いさらばえてゆくという感じ—— フロベールにあって、人間の持続の感情が衰弱の果てに行き着きかねぬ地点とはこのようなものである³¹⁾。

今や我々は、フロベールにおける子供の意味が理解できるようになったのではない

か。フロベールは、ブルジョワの価値観をまさに象徴している子供たちを巧みに操って、彼らを生み出した忌むべきブルジョワたちに挫折や幻滅を導くような役割を担わせたのであろう。そして、病死などといった形でフロベールの小説のなかで行われる「子供殺し」とは、絶え間なく再生産されるブルジョワの系譜を断ち切ろうとする、フロベールの意志を具現化したものと見ることができよう。サルトルが、その膨大なフロベール論「家の馬鹿息子」のなかで解明しようとしたのは、このようなフロベールの人格形成がいかになされたのかをたどる、遠大な冒険にほかならない。

注

- 1) フィリップ・アリエス「〈子供〉の誕生」、杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、1980年。
- 2) フロベールの作品からの引用は、すべて岩波文庫による。「ボヴァリー夫人」上・下巻、1960年、伊吹武彦訳、「感情教育」上・下巻、1971年、生島遼一訳、「三つの物語」、1940年、山田九郎訳。ただし、仮名遣い等改めたものもある。
- 3) 「ボヴァリー夫人」上巻、12ページ。
- 4) 同書、58-59ページ。
- 5) ウラジミール・ナボコフ「ヨーロッパ文学講義」野島秀勝訳、TBSブリタニカ、1982年、70-71ページ。
- 6) 「ボヴァリー夫人」上巻、108ページ。
- 7) 同書、109ページ。
- 8) 同書、83ページ。
- 9) 同書、83ページ。
- 10) 「ボヴァリー夫人」下巻、264ページ。
- 11) 同書、253ページ。
- 12) 「感情教育」上巻、13ページ。
- 13) 同書、13ページ。
- 14) 同書、140ページ。
- 15) 同書、154ページ。
- 16) 「感情教育」下巻、68ページ。
- 17) 同書、69ページ。
- 18) 同書、70ページ。
- 19) 同書、70-71ページ。
- 20) 同書、71ページ。
- 21) 同書、197-198ページ。
- 22) 同書、242ページ。
- 23) 同書、264ページ。
- 24) 同書、273ページ。
- 25) 同書、274ページ。
- 26) 「三つの物語」、47ページ。
- 27) 同書、64ページ。
- 28) 工藤庸子編訳「ボヴァリー夫人の手紙」、筑摩書房、1986年、58-59ページ。
- 29) 同書、62-63ページ。
- 30) 同書、80-81ページ。

31) ジョルジュ・ブーレ「人間的時間の研究」, 井上究一郎他訳, 筑摩書房, 1956年,
357 ページ。